

幕末明治の写真師列伝 第八十八回 宮下欽 その十

5月24日、同盟軍は作戦計画に則って行動を開始する。長岡藩兵は塩谷川北岸の人面、下塩の付近から進撃を始める。米沢藩、会津藩、桑名藩、庄内藩、上の山藩、村松藩の各藩兵と水戸藩の残党は、三条、地藏堂、大河津より進撃を始めた。

これに対して、今町口の守備は松代藩五番狙撃隊と二番小隊が5月23日の夕刻に長岡の守備から転進して、守備に就いていた。

5月24日暁、同盟軍が杉沢村付近に集まっているとの報告があり、これに対して薩摩藩と加州藩の兵が攻撃を始めた。しかし同盟軍の勢いが強く、加州藩の兵は撤退してしまい、薩摩藩の軍が苦戦となった。そのため松代藩が急遽応援することとなった。松代藩二番小隊は同盟軍の左方より突進し、同盟軍の側面を攻撃する。松代藩五番狙撃隊は薩摩藩、長州藩の応援の軍と共に本道を進んで、同盟軍の正面を攻撃する。これにより同盟軍は民家に放火して敗走していった。この戦いで疲労した薩長の兵士たちは堀溝村に戻り休息する。そのため松代藩兵は徹夜風雨の中で警備につく。

5月25日暁、今度は同盟軍が赤坂の一本杉方面より攻撃してきた。守備の松代藩五番狙撃隊と二番小隊はただちに応戦、堀溝村にいた薩長の兵も急遽、これに応援に出て左右の山より反撃する。松代藩兵は本道より進撃して、同盟軍が築いた山腹の第一砲台を奪取し、続いて同盟軍が死守して砲撃を始めた第二砲台の攻撃に移る。ここを死守していた村松藩兵はそれに抵抗できずに敗退して山を下っていく。この松代藩兵の勇敢な突撃に驚いた山上の村松藩兵も同様に敗走し、さらに西北の山上を攻撃していた村松藩兵も同調して敗退、駒込方面に後退していった。この戦いでの松代藩兵の活躍は、監軍も称賛するものであった。引き続き松代藩兵と薩長両藩の兵は同盟軍を追って赤坂村に進軍し、さらに駒込村に入る。ここでこれ以上の追撃を諦めて、夕刻にはまた堀溝村に帰隊して休息した。松代藩の二番小隊のみは赤坂山中の警備につき、長岡藩の逆襲を警戒する任務に就いた。

翌26日黎明、今度は北大面口方面と南文納口方面で同盟軍と激戦中との知らせがきて、松代藩兵は直ちにそちらの応援に向かった。このように同盟軍は各所に展開して攻撃を仕掛けてきたため、征討軍は苦戦する。この間にも赤坂山中で警備していた松代藩二番小隊に対して同盟軍は三方より攻撃を仕掛けてきたが、なんとかこれは撃退し、連日の戦いのため疲弊していたこの小隊に代って、松代藩三番小隊と八番狙撃隊の二隊が守備に就いた。

26日夕刻、南文納口方面で戦っていた加州、長州の軍が苦戦中との知らせで、赤坂より松代藩八番狙撃隊が急遽、応援に向かい攻撃に参加する。

翌27日暁、南文納口方面の同盟軍もようやく撤退したため、松代藩八番狙撃隊は再び赤坂に戻って守備に就く。その後、今度は松代藩四番小隊と六番狙撃隊が交代して守備に就いた。このように同盟軍は24日から27日の間、征討軍を混乱させるような作戦を行っていた。このため征討軍は長岡藩の河井の目的が判らず、兵力の分散と集中を繰り返しているばかりであった。

一方、与板藩では、5月26日頃に庄内藩と村上藩の同盟軍が大挙して与板を攻撃してくるとの情報があり、わずかな与板藩兵（五小隊、砲4門）ではこれに対抗できないと考えて、関原、長岡方面

にいる征討軍の本営へ援軍の要請をしていた。

5月27日夕刻、与板藩の金ヶ崎町入口付近に同盟軍が攻め寄せてきた。ここは与板藩の第一軍が守備をしていたが、すぐに当の浦に撤退してしまう。これに対して征討軍の応援部隊が当の浦で与板藩兵と合流して、同盟軍に反撃をして、なんとか敵を退け、そのまま厳重な守備に就いた。直ちに軍議が開かれ、金ヶ崎へは長州藩、須坂藩兵を配置、塩之入峠口には薩摩藩、長州藩、飯山藩、戸山藩、与板藩の兵を配置した。この時の征討軍の応援部隊は、薩摩藩二小隊、長州藩一小隊、戸山藩二分隊、須坂藩一分隊、飯山藩一小隊の約300人余りであった。

ここでもう一度補足すると、大政奉還後、彦根藩井伊家宗家は譜代筆頭にも関わらず新政府側に藩論を転向させたことから（井伊家は代々勤皇を是としていたともいう）、支藩である与板藩もそれに従うことにした。与板藩の近隣の諸藩は会津藩の影響もあり、佐幕色を強めて新政府軍と戦ったが、与板藩は前記の事情から新政府軍側に就く構図となり、孤立した存在となっていた。また当時中立を表明していた長岡藩には与板藩の事情を説明してはいたが、長岡藩は一転して同盟軍に加盟したため与板藩と敵対する関係になってしまった。その結果、与板藩は新政府軍の前進拠点としての役割を果たすこととなった。

この翌27日、28日の戦いは与板藩にとって藩の存亡に関わる大激戦となった。5月28日、与板城外で同盟軍と戦っていた薩摩藩、長州藩の兵を応援するため、松代藩六番小隊、長府報国隊、尾州藩一小隊が救援するべく向かう。与板城の後山で同盟軍と戦っていた飯山藩兵が苦戦中とのことで、直ちに松代藩、長府報国隊、尾州藩の三小隊がこれを救援して同盟軍と戦い、敵の弾が飛び交う中を後山の山上まで登り、ついに同盟軍を敗走させる。その後、同日夕暮れまでに、この三隊は陣ヶ嶺に到着した。ここで協議をして松代藩六番小隊と長府報国隊は陣ヶ嶺の砲臺の警備に就き、飯山藩一小隊は塔ヶ嶺の砲臺の警備に就き、尾州藩一小隊は衣掛山の砲臺の警備に就いた。ここで各藩は砲台を新たに築造して洋式砲を設置し、谷を隔てた鷹ヶ嶺の同盟軍砲台と砲戦を繰り返すことになる。それは連日昼夜を問わず、休まず行われたという。この方面の同盟軍は一度敗退したものの執拗に陣形を整え、逆襲の機を伺っていた。

これに対して征討軍は与板城北の兜巾堂山、町外れの端稲荷社の二か所に集結して、周到な準備の後、亥の刻（午後11時）に同盟軍に対して夜襲戦を行うと事を計画した。この夜襲戦の計画では松代藩の応援部隊も含めて、徹夜して三方面より同盟軍を挟撃する作戦であった。

その夜、征討軍はこの夜襲戦で同盟軍に多大な損害を与えることに成功して、翌29日暁、同盟軍を総退却させることができた。これによりついに与板の危機一髪の状態から与板を完全に救うことができた。これは与板藩の士族、領民一同が、郷土与板防衛のために必死で努めた結果でもあった。しかしながら与板城下の戦跡では、信濃川に沿って五、六町に渡って敵の死体や銃器が散乱して激戦であったことが偲ばれたという。

（森重和雄）